

4-2 歴史的変遷からみた人とクリークとの関係の変化

戦前では多面的な関わりの中にあったクリークも、現代では、農業のためだけのクリークとなってしまった。そこで、このような関わり方の違いによって、住民の意識にどのような差異がみられるのかを探るために、「戦前住民」と「現実的現代住民」の比較によって、人とクリークとの関係性がどう変化したかを考察する。現代の対象者の中でも、「現実的現代住民」のみと比較するのは、現代において、実際に行われていることやその経験に基づくデータであり、比較可能と考えたためである。

4-2-1 中心度の違い

「戦前住民」、「現実的現代住民」それぞれの項目別の中心度をみると、戦前においては「クリーク」、「川」、「生物の生息」、「農業における用水・排水」、「泥土揚げ」が上位5項目である。また、現代においては、「クリーク」、「水田」、「生物の生息」、「農業における用水・排水」、「稲作」が上位5項目である。

中心度だけをみても、戦前においては「川」という水源がまず意識され、豊かな食文化を生んだ「生物の生息」、主な産業である農業のための「農業における用水・排水」、そしてクリークの維持管理活動である「泥土揚げ」が意識されており、それだけ多面的な関わり方をしていたことがわかる。逆に現在においては、農業が主な産業であり、「生物の生息」を除いては、農業に関係する項目が上位を占めており、人とクリークとの関係が一元化されていることがわかる。

表 4-6 戦前住民と現実的現代住民の総合影響評価

項目	戦前住民				現実的現代住民			
	総合影響効果				総合影響効果			
	影響度	影響度	中心度	原因度	影響度	影響度	中心度	原因度
1. クリーク	2.013	2.358	4.371	-0.346	1.537	1.547	3.084	-0.010
2. 水田	1.271	1.470	2.741	-0.198	0.982	1.258	2.240	-0.276
3. 山	0.616	0.432	1.048	0.184	0.447	0.426	0.872	0.021
4. 川	1.113	1.794	2.907	-0.680	0.806	0.928	1.734	-0.122
5. 有明海	0.679	0.384	1.063	0.295	1.290	0.136	1.426	1.154
6. 生物の生息	1.583	1.771	3.354	-0.189	0.400	1.318	1.717	-0.918
7. 農業における用水・排水	1.575	1.545	3.120	0.030	0.564	1.343	1.907	-0.780
8. 稲作	1.567	1.278	2.845	0.289	1.023	0.740	1.764	0.283
9. 稲作以外の生産活動	1.126	1.076	2.201	0.050	0.000	0.260	0.260	-0.260
10. 生活における用水・排水	1.073	0.627	1.700	0.447	0.223	0.491	0.714	-0.269
11. 郷土料理	1.077	0.842	1.918	0.235	1.305	0.074	1.379	1.231
12. 祭りや行事	1.185	1.355	2.540	-0.169	0.000	0.176	0.176	-0.176
13. 堀干し	1.072	1.646	2.718	-0.574	0.117	0.381	0.498	-0.264
14. 泥土揚げ	1.318	1.552	2.870	-0.234	0.000	0.095	0.095	-0.095
15. スクメの設置	0.680	1.107	1.787	-0.427	0.692	0.089	0.781	0.604
16. 子供の遊び	0.632	0.351	0.983	0.280	0.071	0.000	0.071	0.071
17. 伝説・言い伝え	0.746	0.332	1.077	0.414	0.000	0.095	0.095	-0.095
18. 集落内でのつながり	0.936	1.003	1.940	-0.067	0.000	0.701	0.701	-0.701
19. 近隣の集落とのつながり	0.755	0.561	1.316	0.195	0.305	0.333	0.638	-0.029
20. 外部地域とのつながり	0.369	0.290	0.659	0.079	0.000	0.111	0.111	-0.111
21. 行政	0.832	0.446	1.278	0.387	1.163	0.421	1.584	0.742

各影響度・中心度の上位5項目

原因度の上位3項目

原因度の下位3項目

4 - 2 - 2 戦前と現代の共通点

戦前から現代まで、関係性の変化があまりみられないのが、「稲作」における関係性である。図 4-3、4-6 をみると、どちらも「川」、「水田」、「農業における用水・排水」に最も強い影響を与えていることが分かる。これは、どちらの時代においても稲作が主要な農業であり、農作業の形態や農地や水利の変化があったとしても、クリークから水を取り入れ、排水するという方法は原則的には変わっていないためであると考えられる。

4 - 2 - 3 意識過程の違い

最も注目したいのは、戦前においては、人間がクリークに関わる際に、慣習的な行為を重視していることである。

例えば、クリークの代表的な維持管理活動であり、祭りともいえる行事であった、「堀干し」や「泥土揚げ」は、戦前では、他の項目と比べて中心度は高いが、現実的現代住民においては、その中心度は比較的小さい。また、関連図をみると、他項目との関連性も、戦前においては、「堀干し」は他の項目が大きな影響を与える項目のひとつであるが、現実的現代住民にはほとんどそのようには思われてはいない。現代住民は、例えば「郷土料理」や「祭りや行事」から直接「生物の生息」へ影響しているが、戦前住民においては、まず「堀干し」へとつながっている。

ここでわかることは、現代住民が伝聞などの知識によって自然環境を意識していることに比べて、戦前住民は、伝統的慣習のような行為によって、体験を通して自然環境と接し、意識していたということである。

4 - 3 属性の違いによる要素関連の比較

4 - 3 - 1 現代における立場の違いにみる意識の違い

現代の佐賀平野のクリークに関わる人間でも、その立場や考え方の違いによっては、異なった意識を持っている。その違いを、農家、市民団体、行政と大きく 3 つに分けて考察する。

(1) 現在住民の比較

現実的住民が産業と自然環境への意識が高いのに比べて、理想的現代住民は、「祭りや行事」や「泥土揚げ」など、かつて盛んであった人間のクリークに関わる行為への意識が高い。したがって、理想的現代住民は、これらの要素がどれだけ人間とクリークとの関係に影響していたかということの知識は持っていることになる。

このことは、理想的現代住民が「幼少期にゴミクイを見た、経験したという思い出があり、それを財産と思い、又後世に残していきたいという思いは有るのですが…。単なるノスタルジーだけでは今の生活が出来ないし、クリークとて所詮人工のもので基盤整備による水路に置き換えられないというわけではないという事実もまた現実なんですよ。ただそこに割り切れないものを感じるのもせいぜいわれわれの世代まででしょう。」「子供の頃にはよく蓮の実とり・鮒釣り・蓮根掘り等をして遊んでいました。夏は水泳等もしました。今は危険だということであまり近づかない指導がされてさびしいですね。」と自由記述しているように、クリークを懐かしみ、単なる農業用水路ではなく、地域の水環境としての役割を求めていることが推測できる。

(2) 理想的住民、水環境関係団体、行政の比較

この3集団は、現代対象者の中で影響度の評価が回答の全体的に高かった（APPENDIX 参照）。しかし、その意識は、異なる項目へ集中しており、この集団のクリークへの関わり方からなぜそのような違いがあるのかを考察をする。

まず、理想的現代住民は、「祭りや行事」、「生物の生息」、「泥土揚げ」、「稲作以外の生産活動」に影響・被影響が集中している。これは、「生物の生息」は、マスコミ等で取り上げられることから評価が高くなったと考えられるが、その他の項目は、産業、生活・文化に関わる項目で、住民が生活とともにクリークの存在をノスタルジックに考えていることがわかる。

次に、水環境関係団体は、自然環境に関係する項目への意識が高く、豊かな自然環境である水環境を保全していこうという団体活動が表われていると考えられる。また、唯一自然環境ではなく、人の行為に関する項目である「堀干し」への各項目の影響度が高いと評価された。その理由として、被験者である団体関係者は、「'00さが水環境フェア」という佐賀の水環境に関わる団体が主催するイベントに参加したことが挙げられる。そのイベントで、「堀干し」、「泥土揚げ」のデモンストレーションが行われたために、「堀干し」への影響度が高く評価されたのではないだろうか。

また、行政は、「生物の生息」、「祭りや行事」、「堀干し」、「泥土揚げ」に意識が集中しており、4-1-5でも述べたように、「生物の生息」、「堀干し」、「泥土揚げ」の問題と「祭りや行事」とのつながりなど、行政の問題意識も、単にクリーク整備の問題だけではなくなっていることが分かる。

これらのことから、クリークへの関わり方によって、問題意識も異なることが分かる。以下に各属性の意識をまとめる。

- 住民 → 効率的な現代農業を重視する一方、地域の水環境としての関わりを求めている。
- 水環境関係団体 → 自然環境を大切にしなければならない。
- 行政 → 今ある問題を解決し、クリークの保全とさらなる利用を図りたい。

クリークの問題へは、この違いを認識して取り組んでいかなければならない。水環境関係の団体は、自然を大切にしたいと思い、住民は自分達の生活が一番ではあるが、クリークが保全され、利用し、されることを望んでいる。行政においては、クリークの問題解決と地域住民のつながり、文化の継承を求めている。意識が違うから対立するのではなく、意識が違うことで、それぞれが重なれば多元的な関係を生むことができるのではないだろうか。例えば、団体主催のクリークのイベントに住民が関わり、行政がバックアップするなどである。

4-4 伝統的慣習をテーマとしたイベントによる クリーク的环境社会システムの再構築の可能性

伝統的慣習をテーマとしたイベントによって人間とクリークの関係の再構築ができると考え、「堀干し」と「泥土揚げ」のイベントとしての可能性について考察する。この2項目は、DEMATEL 調査の結果では、現実的現代住民を除いて多くの項目と関連があり、意識も高くなっており、ヒアリングや文献からの情報によると、産業・生活・文化の様々な面において各人それぞれの思いがある行事であったことがわかった。またこれらは、かつてはイベント性を持っていた行事であるため、現在においてもイベントとしてアレンジしやすいと考え、この2項目についてとりあげることにした。

4-4-1 各属性の回答にみる堀干しと泥土揚げの多様性

「堀干し」は、稲刈り後の12月、おくんちのときに行われ、「泥土揚げ」は2~3月に「堀干し」にて水位を落とした後に行われる。この2つの行事は、部落の共同作業で水を落とすことから護岸等の整備を行なうことや、ヌクメを開いて魚を捕るなど、類似している点が多く、回答者にも同じような項目と関係を持っていた。そこで、ここではこの2項目を同時に捉えて考察する。

(1) 戦前住民

「堀干し」と「泥土揚げ」は、図4-16、4-17からわかるように、自然環境に関する項目、産業に関する項目、生活・文化に関する項目、社会組織に関する項目、のすべてと関係性をもっていた。戦前においては「泥土揚げ」という伝統的な慣習が人間とクリークとの関係を複雑で多様なものにするために大きく影響していたことが分かる。

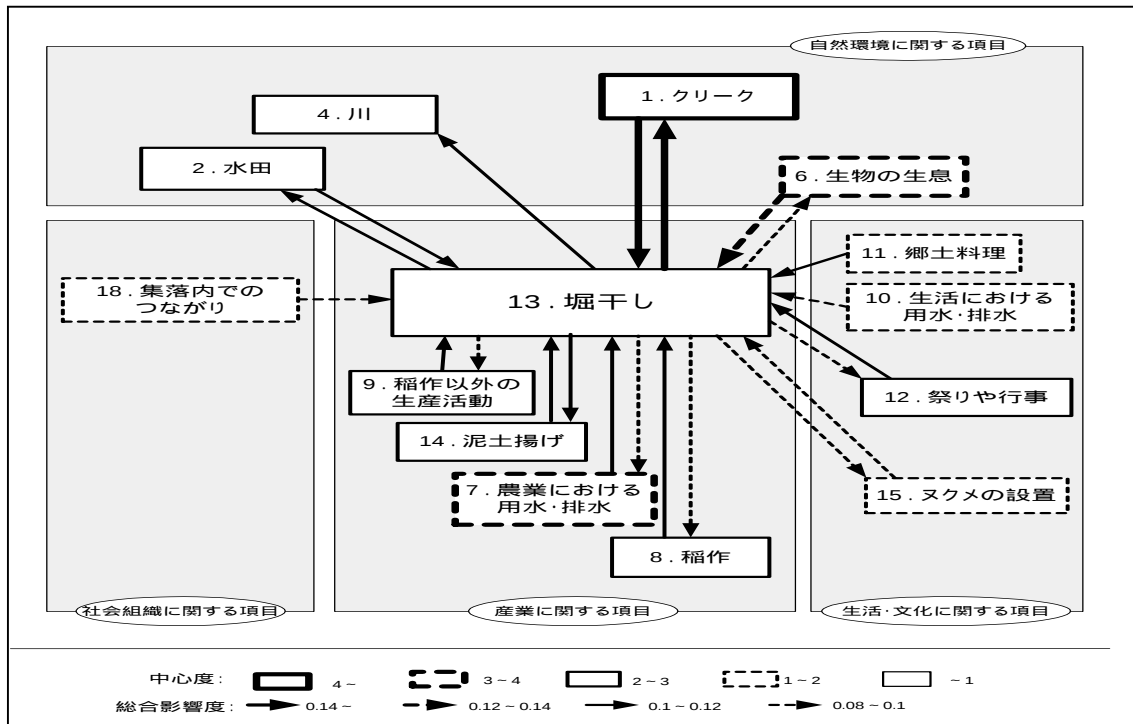


図 4-16 戦前住民にみる堀干しを中心とした要素関連

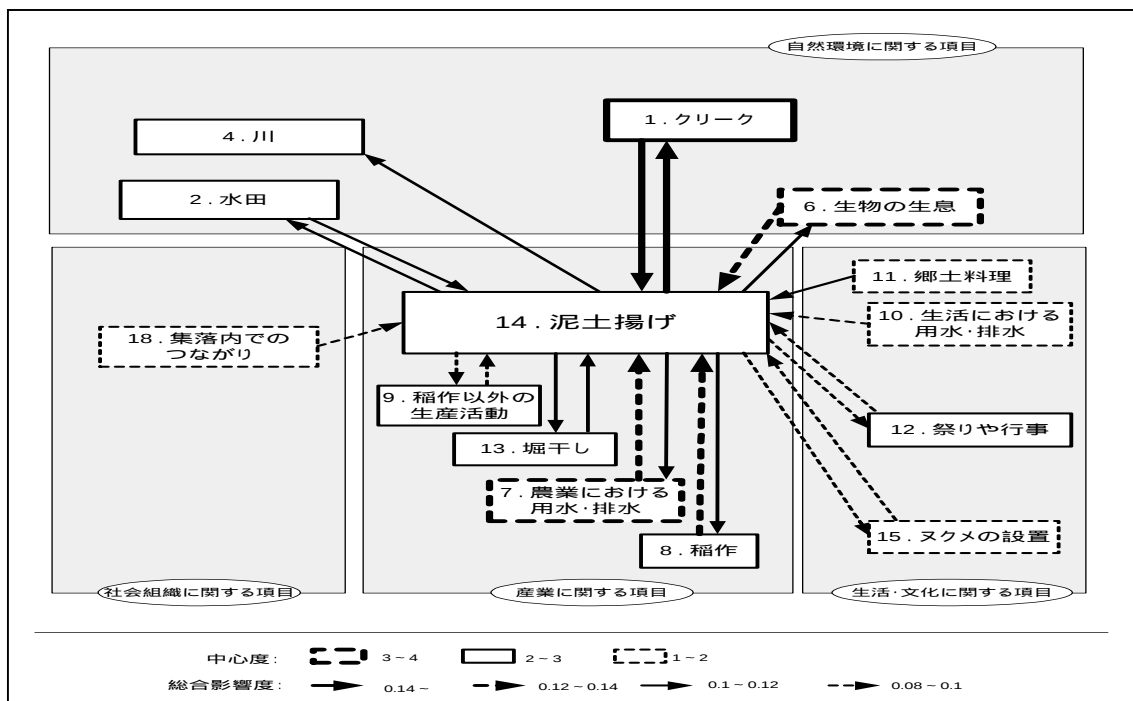


図 4-17 戦前住民にみる泥土揚げを中心とした要素関連

(2) 現実的現代住民

図 4-18、4-19 をみると、現実的現代住民は、「堀干し」や「泥土揚げ」をおこなっていないだけでクリークとの関係が薄くなっていることが分かる。「郷土料理」については、魚をとっていたという聞いたことからの評価であろう。

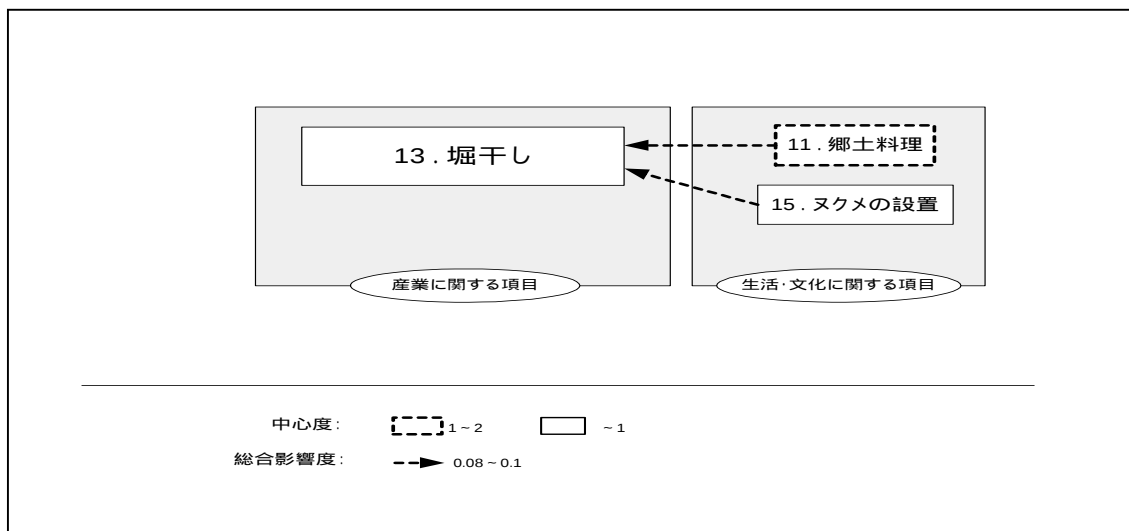


図 4-18 現実的現代住民にみる堀干しを中心とした要素関連

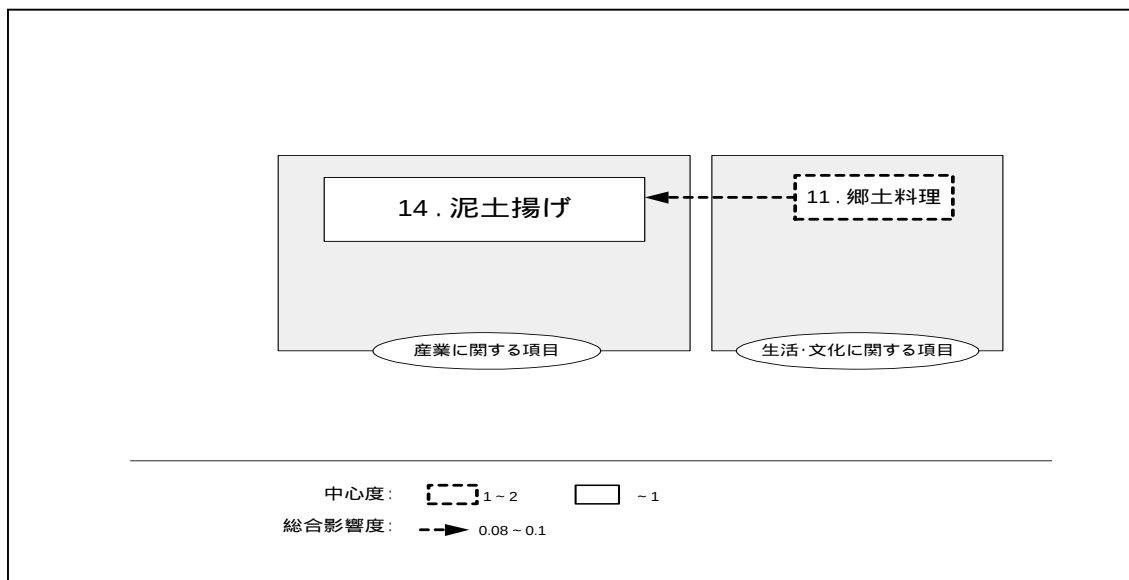


図 4-19 現実的現代住民にみる泥土揚げを中心とした要素関連

(3) 理想的現代住民・水環境関係団体・行政

この3グループは、図4-20～25からわかるように、戦前住民と同じように多様な関係性を「堀干し」と「泥土揚げ」に意識している。「堀干し」や「泥土揚げ」は、行為としては行われていなくても、知識として知っているだけでも意識構造の中にはあることがわかる。

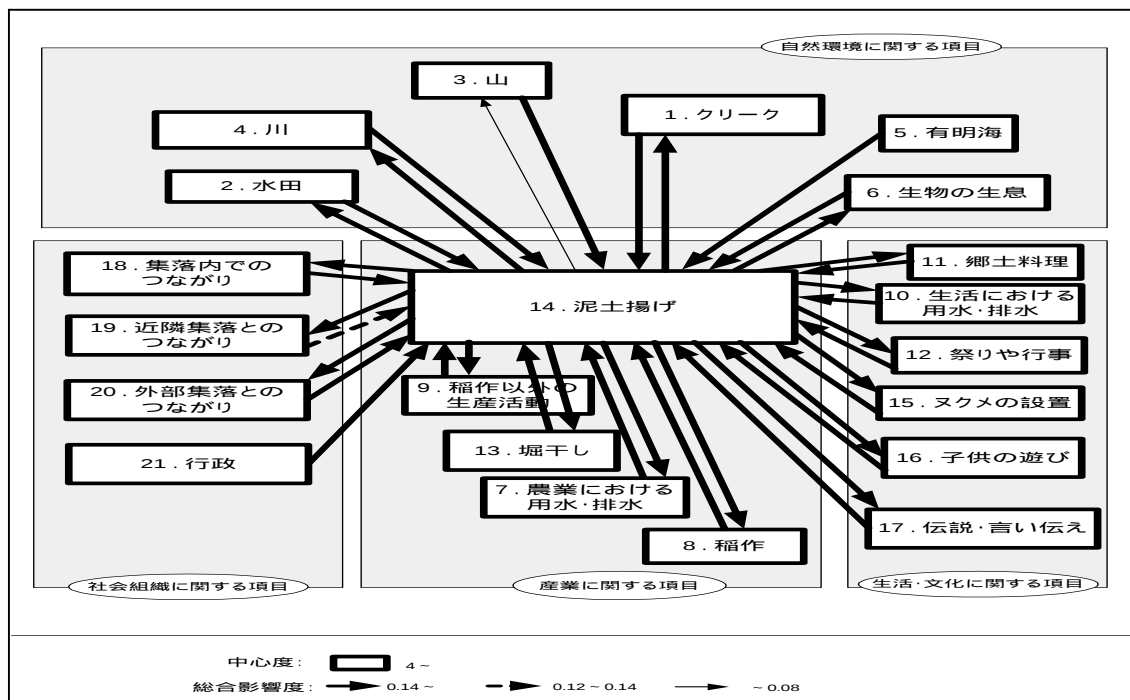


図4-20 理想的現代住民にみる堀干しを中心とした要素関連

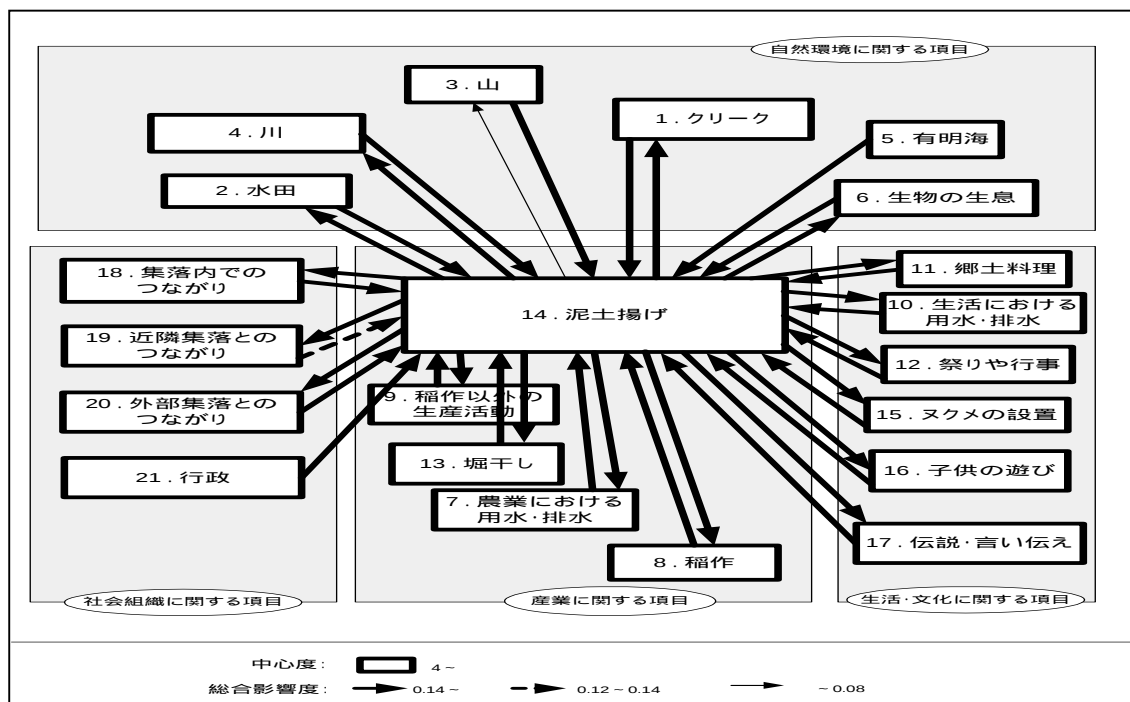


図4-21 理想的現代住民にみる泥土揚げを中心とした要素関連

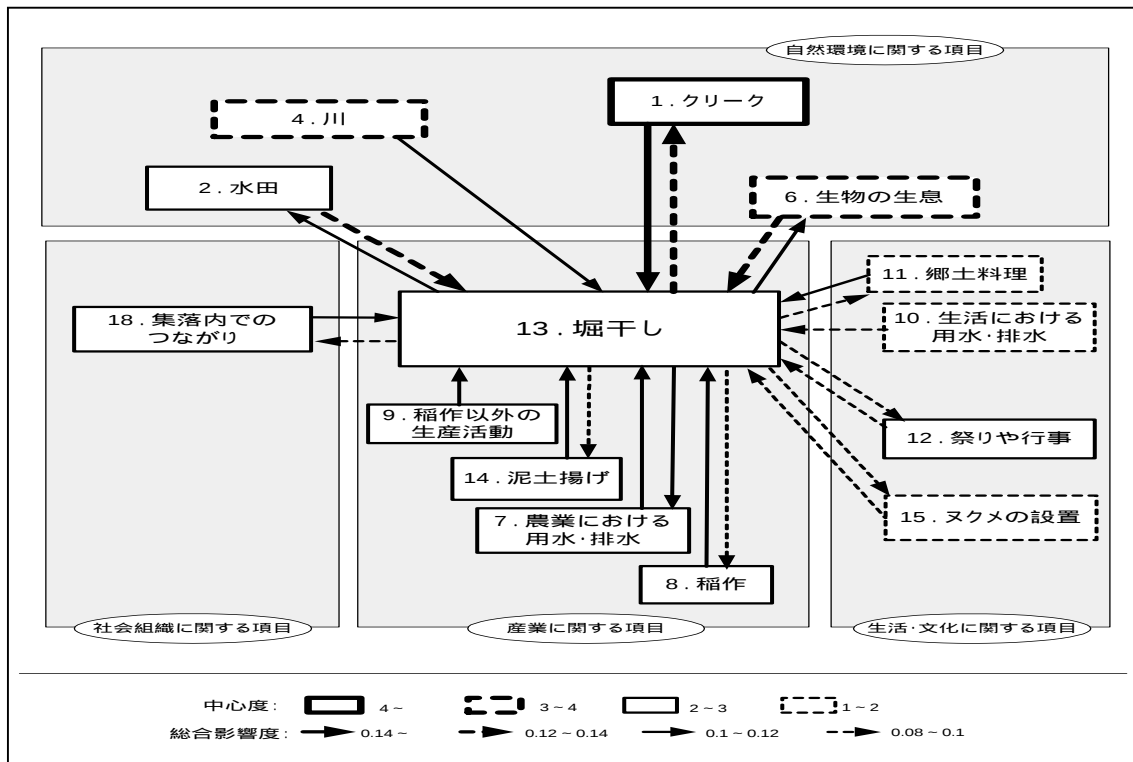


図 4 - 22 水環境関係団体にみる堀干しを中心とした要素関連

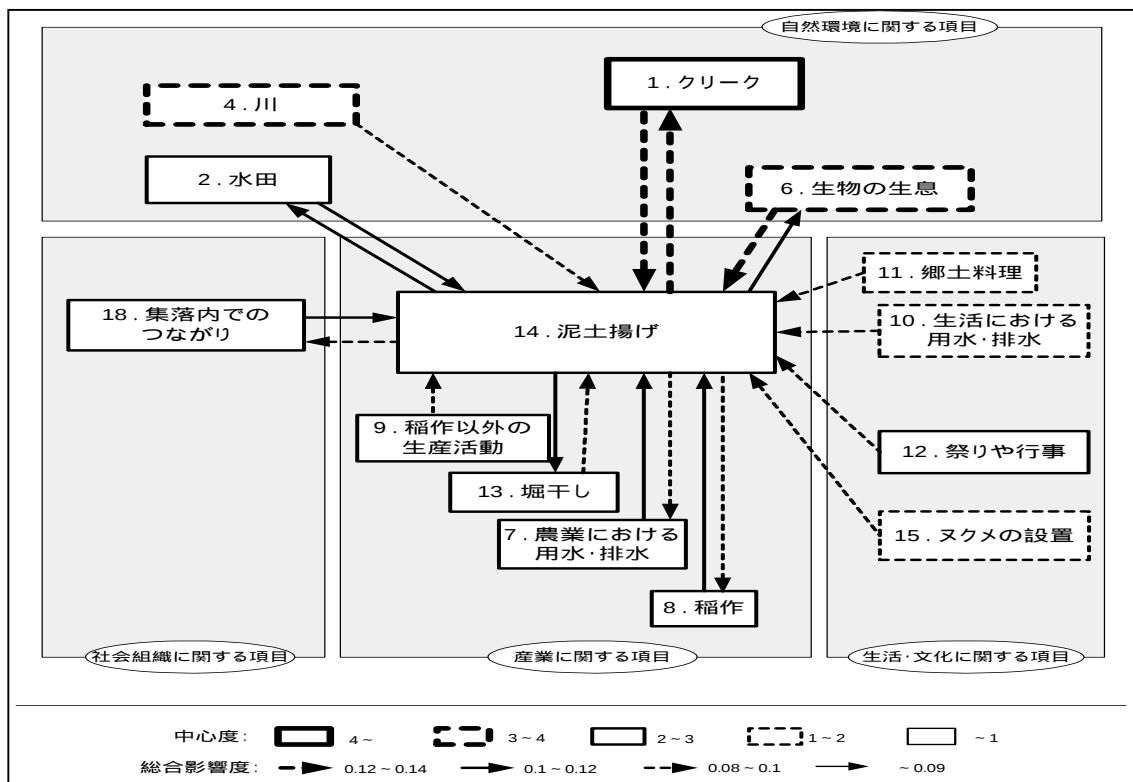


図 4 - 23 水環境関係団体にみる泥土揚げを中心とした要素関連

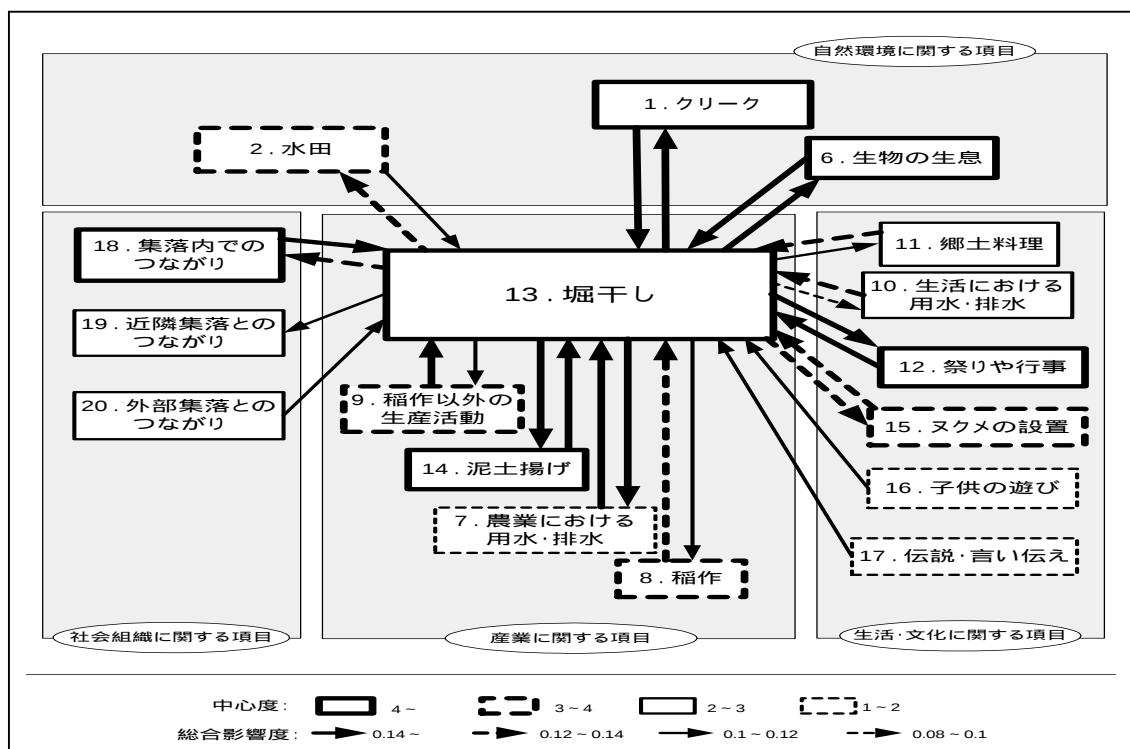


図 4 - 24 行政にみる堀干しを中心とした要素関連

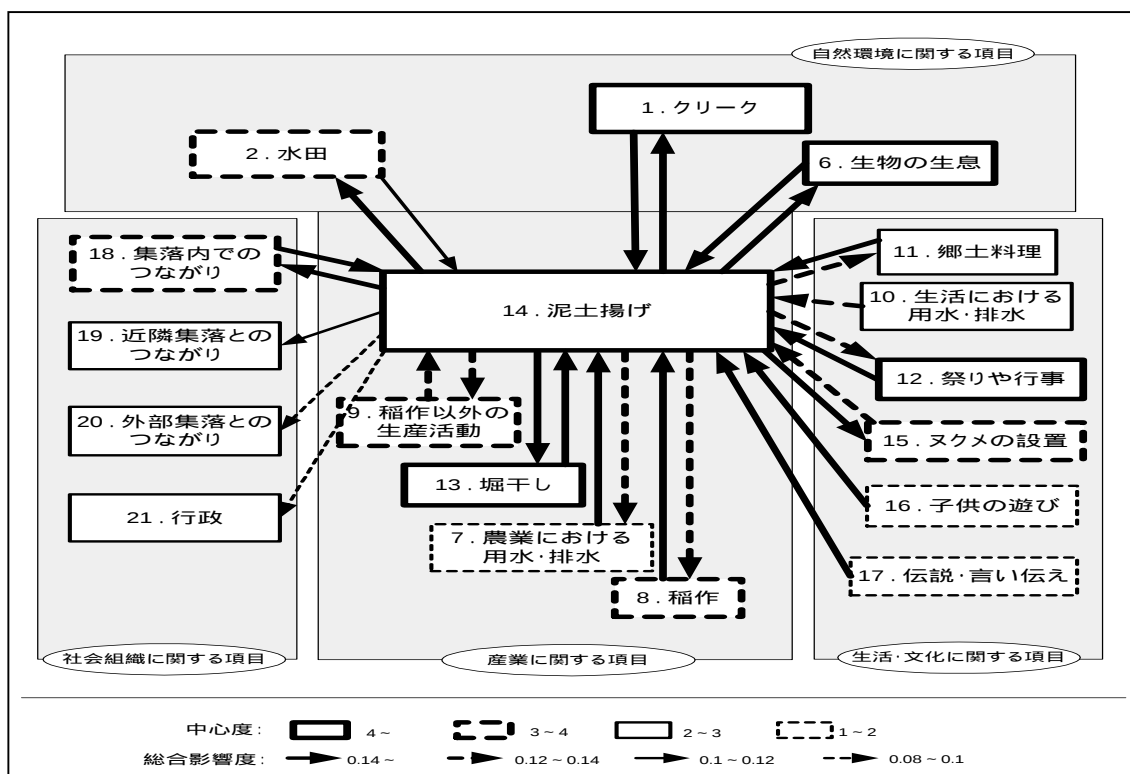


図 4 - 25 行政にみる泥土揚げを中心とした要素関連

4-4-2 戦前の泥土揚げと現代のイベントによる泥土揚げの比較

前項によって、戦前では「堀干し」や「泥土揚げ」によって、環境、産業、生活・文化、社会といった多方面にクリークとの関係性を持っていたことがわかった。また、現代においても、意識構造の中では重要視されている。このことから、「堀干し」や「泥土揚げ」がイベントとしての可能性を持っていると考え、具体的な例を取りあげて考察する。

(1) 現在の泥土揚げのイベントにおける人間とクリークの関係性

水環境フェアで行われた泥土揚げのイベントをもとに、実際のイベントとしてどのような要素との関連があるのかについて考察する。

水環境フェアにおける泥土揚げの概要

計画は、市民団体・行政・地元住民を交えた話し合いによっておこなわれた。当日実際に泥土揚げをおこなう人もこの人たちであった。戦前の泥土揚げ機をもちいておこなわれ、公園に設置されていたヌクメも開かれた。一般市民の数は多くはなかったが、取れた魚をもらうなどして見学していた。



図 4 - 26 水環境フェアの風景

(左：泥土揚げとヌクメ開きの様子、右：堀から捕れた魚を捕まえる子供たちの様子)

水環境フェアの泥土揚げによる関係性の考察

「生物の生息」には、大きな影響を与られている。このとき取れた魚は、参加者に配られた。しかし、郷土料理についての説明、提供はなく、泥土揚げから魚を食すまでの過程がなく、魚を捕る、分配するという関係があるようだ。このイベントはクリーク公園がある兵庫町の住民によって行われたため、集落や近隣集落とのつながりは強くなる。また、この情報をもっと広く伝えることで、外部地域との交流も新たに発生すると考えられる。泥土揚げは、子供にとっても楽しみな行事の一つであったのだが、このイベントでは子供が遊べるような環境があるにもかかわらず、子供がほとんどいなかった。これは第 1 回目ということで、集まらなかったのではないかと考えられる。

(2) 戦前の多元性からみた「堀干し」と「泥土揚げ」のイベントの可能性

現代行われているイベントが、人間とクリークの間でより多様な関係を深めるように、戦前の泥土揚げと比較し、イベントとしての泥土揚げのあり方を考察する。

産業との関係性

まず、泥土揚げの目的として最も重要で、関係も強かったが、イベント内容にはほとんど考慮されていない関係性が、産業との関係性である。元々の目的である稲作やクリークの維持管理がないままに、泥土揚げの楽しい面である魚取りや子供の泥遊びがクローズアップされ、外部地域との交流をメインの目的として行われている。

ひとつの方法ではあるが、元々の目的を含めたイベント形態もありえるのではないだろうか。泥土揚げは、農業や生活のためにクリークを管理していくための苦しい作業であり、そこから魚取りという楽しみを見つけていたのである。

このことを考慮したものとして、例えば、農業体験を行っている小学校や市民農園などで、昔の泥土揚げの説明とともに稲刈り後に泥土揚げを行うイベントが考えられる。

郷土料理との関連性

「稲作やクリークの維持管理以外の泥土揚げ」の目的として、魚を捕ることが挙げられる。戦前住民は、クリークに豊富な魚が生息していることによって郷土料理という文化をつくってきた。またそれは、お祭りの料理としても食べられており、クリーク地帯の食文化は、クリークとの関わりの中から生まれたといえるのである。

イベントにおいて、魚を捕る体験から食べるまでの体験をすることで、人とクリークとの関係はより多様になり、佐賀の食文化を後世に伝えることにもつながるだろう。これを実施するためには、例えばイベントの場で料理教室をひらいたり、レシピを配布したりといったことが考えられる。

子供の遊びとの関連性

水環境フェアでは、子供の参加は少なく、その子供たちも見学しているだけであった。「水環境フェア」での泥土揚げは始めてだったため、実施することに精一杯で、広報や安全性の確保などまで手が届かなかったが、子供にクリークで遊ぶことを体験してほしいという計画でもあった。クリークに入って泥にまみれて遊び、魚を自分の手で捕まえるといった、自然を肌で感じるができる機会になるであろう。

まとめ

ここでとりあげた「水環境フェア」では、まずは「泥土揚げ」のデモンストレーションが目的であったが、イベントとしての可能性を示すことができたと考えられる。また、このとき「堀干し」は、数日前から少しずつ水位を落とすことによって行われたが、「堀干

し」と「泥土揚げ」の組み合わせも考えられるのではないだろうか。昔の人たちや農家の人たちは、用水・排水をすることによって水の流れを知っており、「堀干し」を組み込むことで「水」という環境を意識することができるのではないだろうか。

また、ここでいくつか提案したことをより効果的にするためには、これらのことを組み合わせでおこなうべきである。人とクリークとの関係は多元的で重層的でありえるし、それを意識することでクリークへの意識や評価が高まってくるのではないかを考えるからである。具体的には、通年でのイベントプログラムにすることやこれらのプログラムを組み合わせ、親子参加で行なったり、参加者の目的などにあわせて内容を変えたりといったことが考えられる。

脚注

- 1) 兵庫町大字淵Tさんより。
- 2) 有明海は干潟の生物、河川では、多布施川に淡水魚の危惧種が生息していることから、雑誌、テレビやアウトドア関係の雑誌で取り上げられている。
- 3) 現在では、昔のように完全に水を落として堀を干しあげてクリークの整備をするということはなくなったが、項目の説明として「水位を落とすこと」と書いていたこともあり、水位が下がるという意味で評価されたと考えられる。

参考文献

- 1) 門間敏幸：TN 法—むらづくり支援システム—実践事例集，農林統計協会（1996）
- 2) 安中誠司他：DEMATEL 法による住民意識構造の分析システム(DEMATEL-COAS) ,9 ,27-63 ,東北農村計画研究（1992）
- 3) 児玉いずみ 他：DEMATEL 法による漁村の環境社会システムの構造分析について，海洋開発論文集，14，483-488（1998）
- 4) 児玉いずみ 他：北海道サロマ湖地区における環境社会システムの構造分析について，環境システム研究，

